

「もっともっと挑戦しよう!!」

—自分に自信をもち、新しいことに挑戦することができる子どもの育成—

I はじめに

II 実践のねらい

III 実践の方法

- 1 対象
- 2 基本的な考え
- 3 各実践のすすめ方

IV 実践の内容

- 1 「初めてやったけど、上手にできたと思いました」学級力向上プロジェクト
- 2 「挑戦することも大切だなと思いました」外部講師や地域の人々とのかかわり
- 3 「自分たちももっとがんばろう」発信の場の工夫

V おわりに

第11分科会
自治的諸活動と生活指導
A 小学校

竹田 裕亮（海部・立田南部小）

研究の概要報告

1 県内の自主的な研究活動のとりくみ状況

素直で従順だが主体性に乏しい。級友に優しいが自己肯定感が低い。そんな現代の子どもたちをたくましい姿に導いていくことは、教員の大きな役割である。愛知県内では、子どもたちに合った支援をすることに重点をおいた教育にとりくんでおり、多くの学校で自治的活動について研究されている。

第72次教育研究愛知県集会における本分科会での研究討論の主題を「たくましく生きる子どもを育てよう」と設定し、主題に迫るために次の3つの柱立てをもとにした全13本のレポートが報告された。

2 本次県教研で論じられた主要な課題

(1) 子どもの気持ちを大切に、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

(1)の柱立てにかかわるレポートは4本。各自に合う最適な目標設定のための工夫、あいさつ活性化にむけたとりくみ、オリジナルのSDGsを掲げた実践が報告された。討論では、よりよい人間関係づくりにおいて、教員が手本を示したり、意図をもってグループ編制したりするなど、教員の適切な支援が不可欠であること。さらに、ICTを積極的に活用する必要性が話題となった。

(2) 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

(2)の柱立てにかかわるレポートは4本。周りの人を大切にできる子どもの育成、自己指導能力を高めるための工夫、ピアサポートを取り入れた人間関係の構築、ペップトークを活用した学級経営の成果が報告された。討論では、子どもの支援において、子どもが自信をもって活動するための場の設定の大切さが話題となり、実際に学級活動で積極的になってきたこと、自信を深めて行動が変容したことが子どもの姿から語られた。同時に、モデルステップの積み重ねや意欲が高まるゴール設定の重要性も話題となった。

(3) どのようにして集団の質を高めていくのか

(3)の柱立てにかかわるレポートは5本。仲間づくりを核にした安心できる学級環境の構築やかかわり合いを深めることを通して自己の生き方を考える実践、主体的に行動できる子ども育成の工夫、楽しい学校生活をめざした集団づくりについて報告された。今回の討論では、子どもに委ねることと同時に、適切に個々の子どもを支えることで、初めて集団としての質が高まるのではないかと意見が出た。また、多くの参加者から学級目標を大切にする学級経営について語られた。

全13本のレポート発表をもとにした質疑・応答・討論後、総括討論として、自己理解・他者理解を深めるための工夫が参加者の実体験から具体的に語られた。さらに、たくましく生きる子どもを育てるためには、失敗体験を多く積ませることや現状に満足するのではなく、常に改善を求めて向上心をもつことの大切さが語られた。多様な意見が出され、豊富な学びを提供する集会となった。

(竹川 慎哉・原田 康成)

報告書のできるまで

第72次教育研究集会「自治的諸活動と生活指導」分科会は、10月15日愛知県産業労働センターで開かれた。第71次教研までの成果と課題にたち「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに、次の柱立てにより討議された。

1 子どもの気持ちを大切に、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

2 心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

3 どのようにして、集団の質を高めていくのか

数多くの具体的実践をもとに、問題点を掘り起こし、研究協議を積み重ねた。この報告書は、その成果と課題を中心に作成したものである。

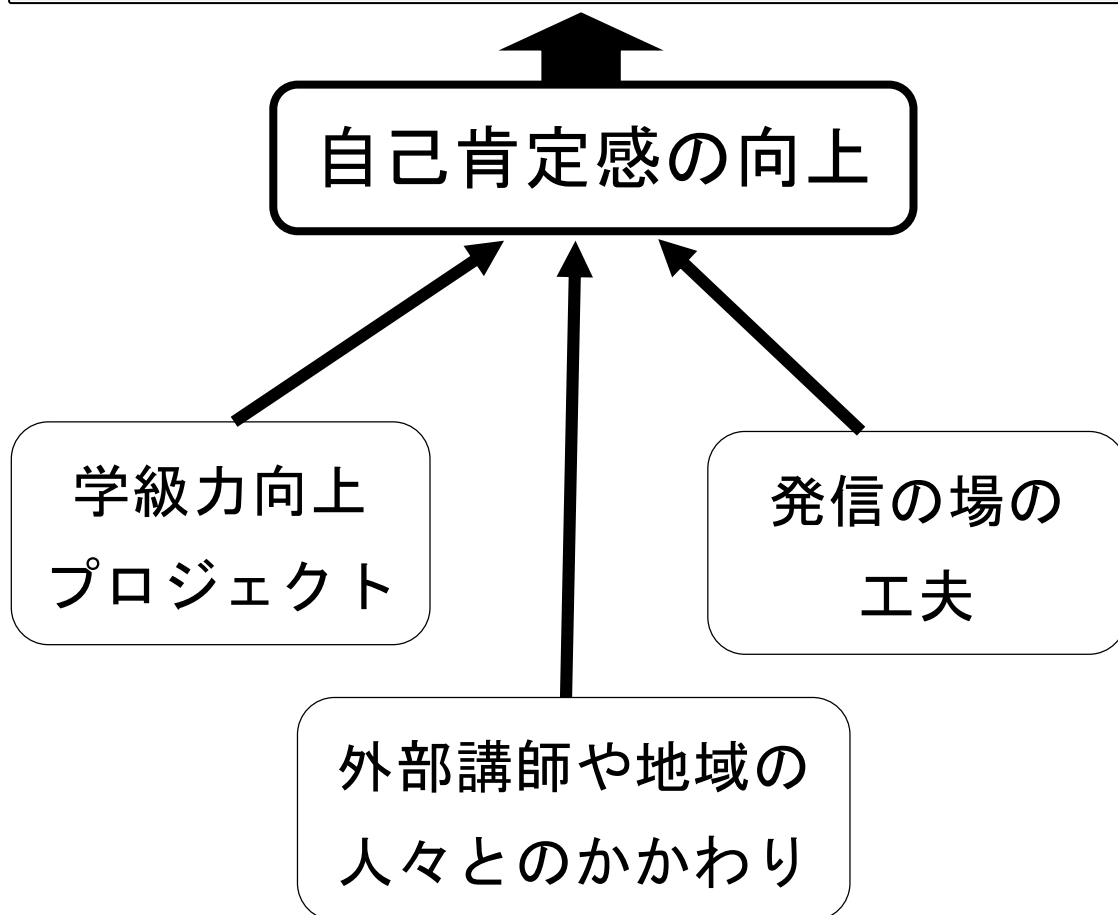
助言者	竹川 慎哉 (愛知教育大学)	原田 康成 (岡崎・根石小)
教育課程	西尾 盛二 (名古屋・東陵中)	太田 早織 (幸田・中央小)
研究委員	小檜山 亮 (海部・甚目寺南中)	富田 賢一郎 (名古屋・本地丘小)
	志知 佑太 (一宮・末広小)	小穴 光俊 (みよし・黒笹小)
	神谷 絢香 (岡崎・六ツ美南部小)	鈴木 潤也 (豊田・若園中)
	羽根田知樹 (名古屋・平針南小)	浅野 和也 (西春・清州中)
	松下 裕哉 (名古屋・千鳥小)	蟹江 陽平 (岡崎・男川小)

報告書の要点

本校の小学生は、素直な子どもが多く、日常生活においては決められたルールを守り、何事にも真面目にとりくもうとする姿がみられる。また、異学年交流活動に継続的にとりくんでおり、異学年どうしや男女間の仲もよい。しかし、新しいことに挑戦し自分を高めようとする姿はあまりみられない。

そこで、学級や異学年交流といった集団活動や他者とのかかわりの場を設定し、さまざまな見方や考え方にふれることで、自己肯定感を高めていきたいと考えた。また、それぞれの活動ごとに振り返りを行い、認め合う中で一人ひとりの自信の向上につなげたい。そして、新しいことに挑戦することで、自分の成長につながる喜びを味わわせ、高みをめざすことの大切さを伝えていきたい。そのために、次のような流れで実践にとりくんだ。

自分に自信をもち、新しいことに
挑戦することができる子ども



その結果、多くの子どもが自分に自信をもち、新しいことに挑戦しようとする気持ちを高めることにつながった。学級に活気が生まれると同時に、高学年として学校全体へも関心を寄せ、よりよくしていこうという雰囲気広がった。

I はじめに

本校は、愛知県愛西市の西部に位置している。また、田畑や蓮田などの自然に恵まれた緑豊かな環境の中にある。素直で真面目な子どもが多く、穏やかな土地柄である。全学年が単学級のため、学級内の人間関係が固定化しがちである。そのため、多様な人間関係の形成をめざして、異学年交流が盛んに行われている。休み時間になると異学年どうしですすんでかわり合おうとする姿が多くみられる。

全校の子どもは136人で、学級数は9（内特別支援学級3）であり、小規模校である。

II 実践のねらい

本学級の子どもたちは、小規模校であるがゆえに、1年生から5年生まで同じ学級で過ごしてきた。そのため、比較的良好な人間関係を築けている。しかしながら、人間関係が固定されていることにより、現状に満足し、新しいことに挑戦して自分をより高めようとする姿はあまりみられない。

こうした現状の背景には、3つの要因が考えられる。新しいことに挑戦して失敗するリスクの方が大きいと感じていること、固定された人間関係によることで向上心が育ちにくいこと、挑戦するメリットそのものを感じ取れないことがあげられる。

そこで本実践では、「学級力向上プロジェクト」、「外部講師や地域の人々とのかかわり」、「発信の場の工夫」の3つに重点をおき、

自分に自信をもち、新しいことに挑戦することができる子ども

を育てたいと考えた。

III 実践の方法

1 対象 5年松組 24人

2 基本的な考え

わたくしは、自分に自信をもち、新しいことに挑戦することのできる子どもを育てたい。そこで、挑戦していこうという前向きな気持ちをもたせるためには、自己肯定感の向上が必要不可欠であると考えた。本実践では、「学級力向上プロジェクト」、「外部講師や地域の人々とのかかわり」、「発信の場の工夫」の3つに重点をおいて、とりくむことにした。

① 学級力向上プロジェクト

学級の課題を自分事としてとらえ、課題解決のために自分にできることを考えて実践する。実践する中で自分の役割に有用感を感じ、学級内で認め合うことで自己肯定感を高める。

② 外部講師や地域の人々とのかかわり

外部講師や地域の人々とのかかわりの中で、「こんな生き方もあるんだ」「自分もこんな人になってみたい」という気持ちを芽生えさせる。

③ 発信の場の工夫

掲示板の活用の仕方を工夫したり、子どもが主体となってすすめる全校集会を計画したりするなど、子どもの思いを発信する場を整える。

3 各実践のすすめ方

実践1 学級力向上プロジェクト 「初めてやったけど、上手にできたなと思いました」

【ねらい】 学級の問題を自分事としてとらえ、問題の解決のために自分にできることを考えて実践する。

- 【すすめ方】
- ① 学級力アンケートをとる。
 - ② アンケート結果をレーダーチャートで視覚化し、学級のよさや課題を知る。
 - ③ 学級会で課題点を解決する方法を考える。
 - ④ 考えた方法を実践する。
 - ⑤ 実践を振り返る。

【留意点】 レーダーチャートの結果と学級目標を照らし合わせて、学級目標に近づいているかという視点で課題を考えさせる。

実践2 外部講師や地域の人々とのかかわり 「挑戦することも大切だと思いました」

【ねらい】 外部講師や地域の人々とのかかわりを通して、見方・考え方について学ぶ。

- 【すすめ方】
- ① 外部講師や地域の人々から学ぶ。
 - ② 振り返る。
 - ③ 自分の生活にいかす。

【留意点】 得た学びを学校生活にいかせるように気をつける。

実践3 発信の場の工夫 「自分たちももっとがんばろう」

【ねらい】 掲示板の活用の仕方を工夫したり、子どもが主体となってすすめる全校集会を計画したりするなど、子どもの思いを発信する場を整える。

- 【すすめ方】
- ① 掲示板を整え、全校集会のすすめ方を工夫する。
 - ② 委員会活動やクラブ活動などでの子どもたちの思いを発信する。
 - ③ 振り返る。

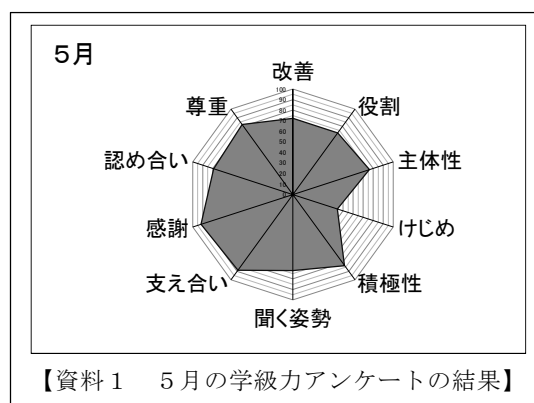
【留意点】 子どもたちの活動を視覚化できるようにする。

IV 実践の内容

1 学級力向上プロジェクト 「初めてやったけど、上手にできたなと思いました」

(1) 青空タイムの運営に挑戦しよう

本学級の学級目標は「ニコニコハッピー 25 たけえもんと5つの約束～助け合い・けじめ・笑顔・もっと挑戦・みんななかよく～」である。この学級目標は、子どもたちがこんな学級にしたいという願いから作成した。5月に学級力アンケートをとり、学級の現状をレーダーチャートで視覚化し、全員が共有した。【資料1】わたくしが考える学級力とは、学級の基礎・基本となる力を



10種類の項目に分けて構成したものである。これらの力を高めることによって、誰もが居心地のよい学級に近づくことができると考える。また、子どもたちが安心して挑戦しようとする気持ちを高めることができるだろうと考え、本実践に取り入れた。

学級力アンケートの結果をもとに、学級会を行ったところ、「けじめの項目が低い」という意見が多く出た。そこで、「けじめ」の項目を向上させるために、時間を守ることのできる学級にしようと話し合い、授業開始時のチャイム着席ができるようにと皆で呼びかけ合った。さらに、レーダーチャートで学級の現状を視覚化したことによって、他にも「改善」「主体性」「役割」などの課題に気付くことができた。

そこで、次は学級目標の項目の一つである「もっと挑戦」に焦点を当て、高学年である5年生として、学校のためにとりくめることはないかと話し合った。その結果、「青空タイム」（異学年でさまざまな活動にとりくむ時間）の運営に挑戦しようと決まった。

本実践では、何事にも真面目にとりくむものの、自分に自信をもてず、なかなか前向きになれないAの変容を追うことで、実践の考察をすることにした。

① 事前の話し合い活動（学級会）

最初に青空タイムの運営にあたり、必要なことを話し合った。青空タイムは6年生が、リーダーとして企画・運営が行われているが、6年生の活動の様子を話し合うことで、リーダーには遊びの種類を決めるだけでなく、最初のあいさつや遊び方の説明などさまざまな役割があることを初めて知った。振り返り活動では、「6年生がこんなたいへんなことをしていると初めて知った」と、記述する子どももいた。

② 青空タイムの事前練習

Aは、活動の趣旨を青空タイムの活動班にうまく説明ができなかったことから、新しいことに挑戦することをためらい、このとりくみに意欲的ではない様子がかげえた。そこで、わたくしはAに声をかけることにした。

教員： Aはどうしてうまく説明できなかったと思ったのかな？

A： なんて話せばいいかわからなかったからです。何も話せませんでした。

教員： 初めてのことだと何を話せばいいかわからないこともあるよね。

A： そうなんです。だからわたしには向いていないです。やりたくありません。

教員： Aはそう思うんだね。だけど、学級の友だちも同じ悩みを抱えているかもしれないね。みんなにも少し聞いてみよう。

他にも青空タイム当日を迎えることに、「うまく運営できるかな」などと不安を口にする子どもがいたため、運営について話し合う場を設定した。すると、「5年生だけで運営の練習をする」という案が出た。そこで、運営する側と遊ぶ側に分かれて、青空タイム本番の活動と同じように練習した。練習を経験した子どもたちは、「説明が長いと時間が足りなくなる」「朝のうちに準備をしないと間に合わない」など、本番を想定したことで新たな気付きが得られたようだった。不安を感じる子どもが多くいた中で、練習の機会を設けたことで、不安な気持ちを共有し、改善をはかることができた。多くの子どもが自信をもった青空タイムの事前練習の機会は、とても有意義なものとなった。

振り返りの活動で、Aは、「初めてやったけど、上手にできたなと思いました」「次は役割を決めて、しっかりと考えてやりたいと思った」「意外に楽しかった」と記述していた。活動前は自分の思いだけを優先していたが、不安を感じているのは自分だけではないと知り、「自分だけから友だちへ」と視野を広げることができた。そして、自分に少し自信をもつことで、次への意欲を高めることもできた【資料2】。

初めて、やったけれど、じょうずに出来たな
と思いました。次は、役わりを決めて
しっかりと考えてやりたいと思いました。
意外に楽しかった。

【資料2 運営の練習後のAの記述】

③ 青空タイム当日

青空タイム当日は、これまで運営の練習をしたこともあり、学級の子どもたちが自信をもって活動をすすめることができた【資料3】。

活動後、学級内で認め合う活動を取り入れ、それをもとに自分の振り返りをした。「学級の友だちにほめてもらってうれしかった」「みんなが楽しんでくれてうれしかった」「朝から準備をしてよかった」「今度はもう少しドッジボールのコートの線を大きくかこうと思う」など、青空タイムを成功したことにより多くの子どもが自信を深めることができた。また、他者評価を通して自分の役割に有用感を感じ、さらに活動をよりよいものにしていこうとする向上心を高めることもできた。

Aも「次は内容をしっかりと考えてやりたいと思ったけれど、みんな楽しそうによかった」と記述していた。この活動を通してAは、自分のできなかった面を反省するだけでなく、「自分から友だち」、そして「他学年の子どもたち」にまで視野が広がり、他学年の子どもたちの思いに寄り添えるほどの成長がみられた。そこで、わたくしはAと活動を振り返った。



【資料3 青空タイムの様子】

教員： 青空タイムの運営に挑戦してみてAはどう思ったかな？

A： 思ったより楽しかったです。最初はうまくできなくてやりたくなかったけど、同じ悩みを抱えている人が自分だけじゃなくて安心しました。みんなで練習もして、自信をもって本番ができました。

教員： 最初は難しいと思ったかもしれないけれど、がんばってよかったですね。

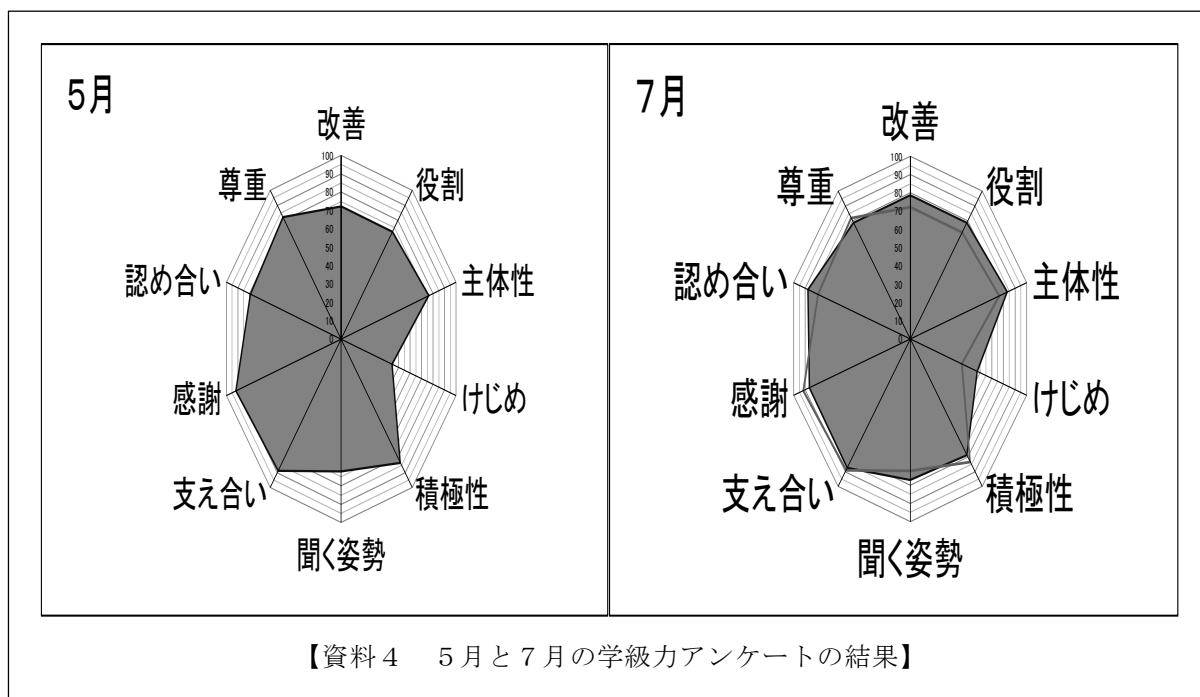
この経験もAにとっては、大きな挑戦でしたね。これをやり遂げたAさんはすばらしいと先生は思いますよ。

A： 自分に自信がもてました。これからも何かに挑戦していきたいです。

教員： がんばってください。

7月に学級力アンケートを行った。5月に比べて「主体性」「役割」「改善」「認め合い」

「聞く姿勢」「けじめ」の6つの項目で数値が高くなったことから学級全体でよりよい方向をめざし始めていることがわかる。ただし、少し数値が下がってしまった部分もある【資料4】。



2 外部講師や地域の人々とのかかわり

(1) 地域とかかわりのある方との交流

学級をさらに活性化させるために、「もっと挑戦している人たち」として、地域振興イベントを開催している方々を外部講師として招いた。講師の方々は、普段それぞれの職場で働く傍ら、地域活性化をはかるためにイベントを成功させるという挑戦を続けている。どうしてイベントを開催しようと思ったのか、イベントをするためにどんなことを考えているのかなど、挑戦することのたいへんさや、やりがいについて講師の方の思いを聞いた。子どもも「イベントを開催するためにこんなにたくさんの計画があるのを初めて知った」「イベントが成功してほしい」など、講師の方々の思いに共感する様子が見られた。また、11月に行われるイベントでは、会場内にある池に来場者がそれぞれの夢や思いを書き、牛乳パックで作った「未来船」に明かりを灯して出航させるとりくみが計画されている。「一緒にこの未来船をつくってほしい」という講師の方々の提案に子どもも賛同し、未来船づくりを行った【資料5】。自分たちもイベントに携わることで、子どもにとっても新たな挑戦をしたという自信につながったようである。

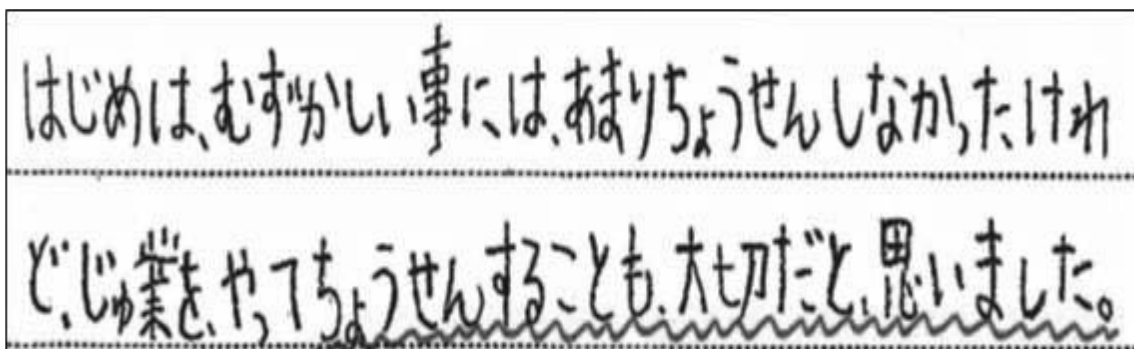
活動後には、「イベントで使用する未



【資料5 未来船を作る様子】

来船の材料の牛乳パックを集めよう」と呼びかける子どもの姿もみられた。また、今後の活動についても「全校で集めたらもっと集められるよ」「もっとたくさんの未来船をつかってイベントで使ってもらおう」「イベントに参加してみたいな」と話すなど、前向きな声が多く聞かれ、子どもの新しいことに挑戦していきたいという気持ちの高まりが感じられた。この学びを通して自分にできることは何かを考え、実際に行動しようとする気持ちが育ったのは大きな成果である。

また、Aの振り返りからも、新たに挑戦しようとする気持ちの高まりがみられた【資料6】。その後、Aは初めて学級委員に立候補し、学級の仲間から選出された。現在も学級委員として、学級をよりよくしようと挑戦を続けている。



【資料6 授業後のAの記述】

(2) 外部講師からの学び（ペップトーク）

5・6年生を対象にペップトークの外部講師を招いて授業を行った。「ペップ」とは、「前向きな」という意味があり、前向きな話し方について学んだ。ペップとは反対の否定的な言葉を講師は「プッペ」という造語で表現し、それを聞いた子どもたちは、「思ったよりプッペを言っていた」「これからはペップを増やしていこう」と「ペップ」と「プッペ」を合言葉に自分たちで言葉がけについて意識し、気をつけようとする姿がみられた。ペップトークに出会い、その重要性を知ったことで、子どもは言葉の大切さを意識するようになった。

3 発信の場の工夫

(1) 掲示板の工夫

掲示板では、子どもの活躍の場の発信をしようと、委員会活動やクラブ活動の予定や活動報告書を掲示できるよう整えた【資料7】。例えば、給食委員会では、食への関心を



【資料7 委員会活動を紹介する掲示板】

高めるキャンペーン活動を行い、その結果を掲示板で紹介した。また、児童会は「あいさつ運動」を行い、毎朝5人以上にあいさつをした人にカードを渡し、そのカードを掲示板に貼り蓄積していった【資料8】。

ここに掲示したことで、子どもたちの活動内容が視覚化され、互いに高めようという思いが生まれた。そして、それぞれの活動がさらに活発になったり、それぞれの活動を認め合ったりすることにつながった。

振り返り活動では、「他の学年もすごいな」「自分たちももっとがんばろう」「自分たちの委員会活動にもいかせそうだな」など、前向きな記述がみられた。



【資料8 あいさつカードを掲示板に貼る様子】

(2) 子どもが主体となってすすめる全校集会

昨年度までは、教員が主体となって全校集会を運営していたが、子どもたちの中から、「自分たちの活動を、自分たちでみんなに知らせたい」という声があがるようになった。そのため、わたくしは子どもたちの思いを実現させたいと考え、特活・集会担当の教員とも打ち合わせを行った。また、児童会や委員会の子どもを中心に、「どんな形の集会にしていきたいか」を何回も打ち合わせをしながら、子どもたちが不安にならず自信をもってとりくむことができるようにした。

本年度の全校集会は、子どもが主体となって運営するようになった。主な司会は児童会が務めて、委員会活動やクラブ活動、学級から希望を募り、それぞれのとりくみを発表する場を設けた。

給食委員会では、食に関する関心を高めさせたいという思いがあり、タブレット端末を用いて作成した給食クイズの動画を各教室に配信した。また、保健委員会では、子どもが主体となって台本をつくり、歯の健康についての劇を発表した【資料9】。

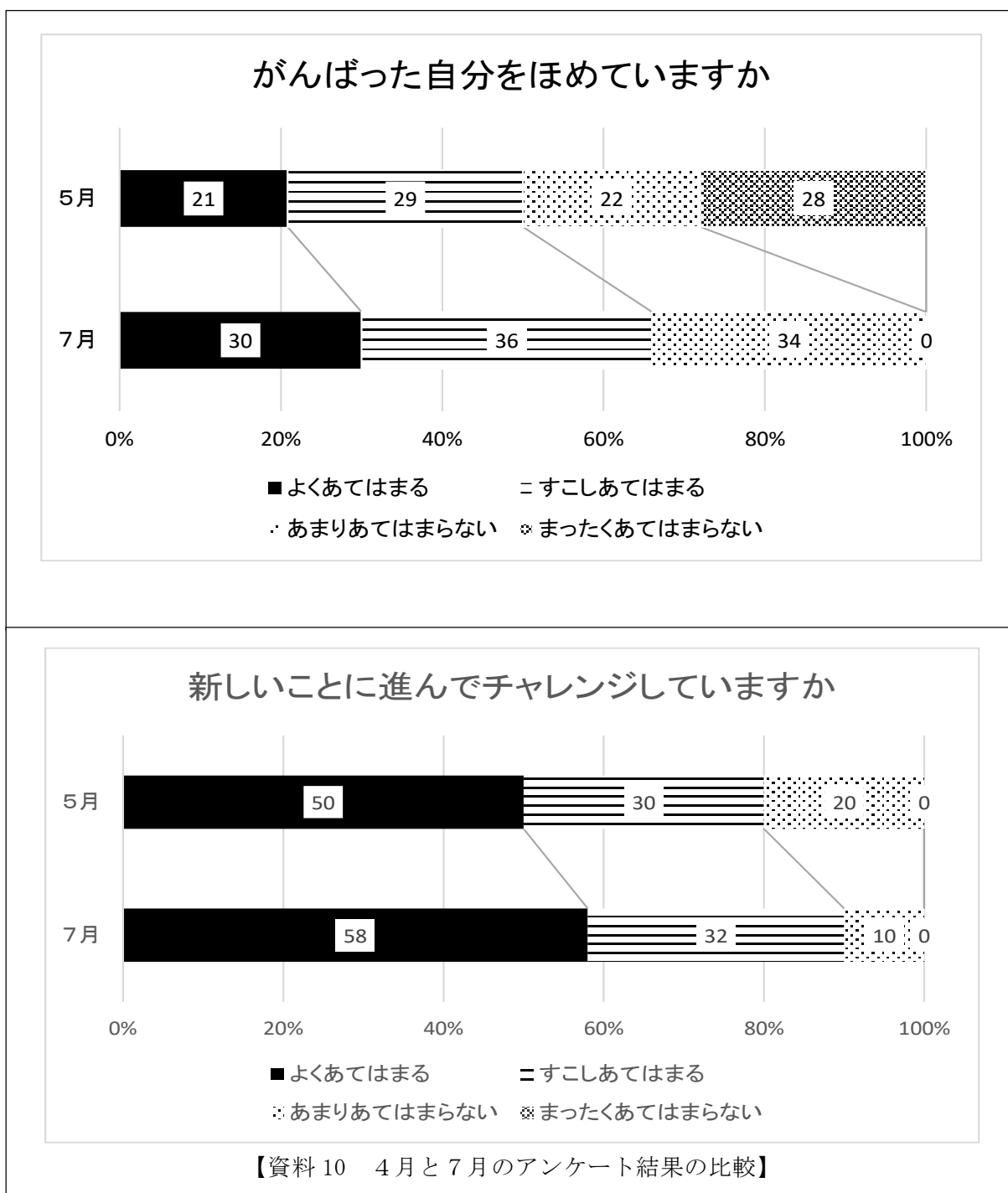


【資料9 保健委員会が劇を行う様子】

振り返り活動では、「全校の前で発表して緊張したけれど、うまくできて自信がついた」「次もみんながもっと楽しんでもくれる企画を考えたい」などの記述がみられた。このように子どもたちが主体となって全校集会を運営したことで、高学年の子どもたちは委員会活動やクラブ活動、学級活動により積極的にとりくむようになった。

V おわりに

4月と7月に5年生を対象に学校生活に関するアンケート調査を行った【資料10】。



「がんばった自分をほめていますか」の問いに対して、「よくあてはまる」「少しあてはまる」と答えた子どもは50%から66%に増加した。「新しいことにすすんでチャレンジしていますか」の問いに対しては、85%から87%に増加した。

以上のことから、今回のとりくみにより、次のような成果と課題が考えられた。

(1) 成果

① 実践1「学級力向上プロジェクト」について

レーダーチャートを活用し、学級の現状を視覚化することで、学級のよさや課題が明確になった。それをもとに学級会で話し合うことで、子ども一人ひとりが学級の課題を自分事としてとらえ、課題改善のための実践に意欲的にとりくんだ。とりくみを通して、お互いを認め合う中で自分の役割に有用感を感じ、自分に自信をもつことにつながった。青空タイムの運営に挑戦した後の学級会では、「これからも5年生主体でやりたい」「もっと新しい遊びを取り入れていきたい」など、新しいことに挑戦しようとする意見が多くあがり、これをきっかけに今後も月1回は、5年生が主体となって青空タイムを運営していくことになった。

② 実践2「外部講師や地域の人々とのかかわり」について

外部講師や地域の人々とのかかわりを通して、さまざまな見方、考え方にふれることができた。子どもも挑戦することのたいへんさや、やりがいを学び、新しいことに挑戦する意欲を高めることにつながった。10月に行われる運動会では、5年生を含めた高学年の子どもが主体となってつくりあげることができた。

③ 実践3「発信の場の工夫」について

掲示板の活用の仕方を工夫したり、子どもが主体となってすすめる全校集会を計画したりすることで、子どもが発信する場が増えた。これにより、他者から認められる機会やお互いを高めようとする機会が増え、子どもたちが新しいことにも前向きに活動にとりくむことにつながった。

④ Aの変容について

当初は、何事にも真面目にとりくむものの、自分に自信をもてずなかなか前向きになれない様子であった。振り返りや発言からも、「できない」「やりたくない」などの消極的な言葉が多かった。しかし、本実践を通して、自分に自信をもち、前向きな気持ちをもつことができた。振り返りや発言にも前向きな言葉が多くみられるようになり、学級の友だちから認められる経験を数多くしたことによって、自己肯定感が高まったことが感じられる。学級でも笑顔が増え、学級委員としての信頼も日々高まっている。最近の振り返り活動では、「挑戦していきたい」という言葉をよく使うようになり、向上心をもって日々過ごすことができている。

これらの実践を通して、子どもたちが主体的にとりくむ様子や挑戦しようとする様子から多くの子どもが自己肯定感を高め、新しいことに挑戦しようとする気持ちを高めることにつながった。また、子どもたちからは「もっと挑戦していきたい」という声が多くあがるようになり、学級に活気が生まれた。それと同時に、高学年として学校全体へも関心を寄せ、よりよくしていこうという雰囲気広がった。

(2) 課題

今回の実践で成功体験を積み重ねたことで、子どもたちは自信を深めることができた。挑戦していこうという気持ちの高まりがみられる一方、現状に満足している子どもがいるのも事実である。今後は「さらなる高みをめざす」ことを課題にあげ、失敗を恐れずに挑戦する子どもを育てていきたい。